第25回情報知識学フォーラム予稿

コロナ禍におけるソーシャルディスタンシング空間の 文化的利用に関する試み ～キテンプロジェクトを事例として～ An Attempt at a Cultural Use of Social Distancing Space in the Corona Disaster - A Case of KITEN Project

堀井洋^{1*}, 原嶋亮輔², 堀井美里¹, 小川歩美¹

Hiroshi HORII^{1*}, Ryosuke HARASHIMA², Misato HORII¹, Ayumi OGAWA¹

1 合同会社AMANE AMANE.LLC

〒921-8147 石川県金沢市大額2-44 N3ビル203号室 E-mail: info@amane-project.jp

2 root design office

〒920-0918 石川県金沢市尾山町6 6-22 Zig 2F E-mail: ryosuke@root-h.com

*連絡先著者 Corresponding Author

コロナウィルスの大規模流行により、図書館や博物館などの公共空間においても人が一定の間隔を保つ”ソーシャルディスタンシング”を維持することが求められている。”ソーシャルディスタンシング”は感染防止の観点から必要な措置であるが、その一方で、施設内の椅子や利用スペースに利用禁止を促す表示が溢れ、人々を広く受け入れることが役割である公共空間に相応しくない状況が拡がりつつあることも事実である。発表者らは、学芸員や研究者などの学術関係者とデザイナーが連携して、コロナ禍における公共空間における文化活動の再生を目指す「キテンプロジェクト」を実施している。本発表では、「キテンプロジェクト」を紹介するとともに、コロナ禍における公共空間と学術関係者・デザイナーとの関わりについて報告する。

Due to the recent coronavirus outbreaks, public spaces such as libraries and museums are required to maintain "social distancing", where people are kept at regular intervals. "Social distancing" is a necessary measure from the perspective of infection prevention, but the appearance of many signs on chairs and spaces in facilities that prohibit their use is not appropriate for a public space whose role is to accommodate the public. A KITEN Project, a collaboration of academicians, such as curators and researchers, and designers, aims to revitalize cultural activities in public spaces during the Coronation Disaster. This paper introduces a KITEN Project and discuss the relationship between academicians and designers and public spaces in the Coronavirus.

キーワード: コロナ禍, 公共空間, デジタルアーカイブ, デザイン

Keywords: COVID-19, public space, digital archive, design

1 はじめに

コロナウィルスの大規模流行により、図書館や博物館などの公共空間においても各人が一定の間隔を保つ”ソーシャルディスタン

シング(社会的距離)”が求められている[1].
ソーシャルディスタンシングは感染防止の観点から必要かつ重要な行動・措置であるが、その一方で、施設内の椅子や利用スペースに

利用禁止を示す表示が溢れ、人々を隔たりなく受け入れることが役割である公共空間に相応しくないことも事実である。

発表者らは、学芸員や研究者などの学術関係者とデザイナーが連携して、古文書など学術資料の新しい表現方法の創出について、これまで取り組んできた。その活動の一環として、コロナ禍における公共空間における文化活動の再生を目指す「キテンプロジェクト」を実施している。本発表では、「キテンプロジェクト」を紹介するとともに、コロナ禍における学術関係者・デザイナーと社会との関わりについて報告する。

2 学術・デザイン分野双方の交流

2017年から著者らは、研究者や学芸員などの学術専門家と、デザイナー・クリエイターなどのデザイン分野の専門家が連携した学術資料の活用に取り組んでいる[2]。本プロジェクトでは、学術・デザイン双方の対等な関係の構築を重視してきた。その理由として、大学などの組織において研究者とデザイナーが関わる場合には、業務発注者および受注者としての関係になることが一般的であり、さらに、業務発注者がデザイナーと直接対話する機会も限定されることも多く、双方の分野の専門家が協働する機会の未だ少ないことが挙げられる。

著者らはプロジェクトを開始するに際して、学術およびデザイン双方の観点から、高品質な学術資料の活用成果を生み出すためには、双方の専門家の密な連携・対話が重要であるとの仮説を設定した。本プロジェクトの実施を通じて、連携・対話の方法や学術資料の活用に関する考え方の違いな

ど、今後の協働にむけた知見の獲得やそれに基づいた協働体制の確立を目指している。

3 「キテンプロジェクト」の概要

2020年初頭から国内でも急速に流行し始めたコロナウィルス（COVID-19）は、2020年11月現在においても、感染は拡大を続けている。図書館や博物館などの公共施設では、感染予防を目的とした一時閉館や入館規制などの対策が実施された[3]。コロナウィルス感染を防止する観点から利用者が互いに距離をとるソーシャルディスタンスは非常に有効な手段であるが、前述したように広く人を受け入れるという公共施設本来の役割を考えた場合には、負の影響も大きいことは明らかである。さらに、今後の流行の長期化が予想されることから、ソーシャルディスタンス継続と文化活動の発展を両立させるこ

図1：「キテンの木」外観

とが重要であるとの認識が、本プロジェクトに参加する合同会社AMANEのメンバーおよび root design 原嶋亮輔氏との間で2020年4月の時点で共有されていた。

本プロジェクトの基本コンセプトは、公共空間において「人と人を隔てること」と「人と人を繋ぐこと」の2つの相反する機能の両立と、新たな文化的空間の創造である。この基本コンセプトに基づいて、「キテンの木」は考案された。「キテンの木」は“文化を植樹する”ことを目的として、公共空間中のベンチやテーブルに付けられた「利用禁止」や「×」といった利用を拒絶する表示の代わりに、人と人との距離を保ちながら、ポジティブなメッセージを発信できるツールである。「キテンの木」の外観を図1に示す。基本的なデザイン構成は、木をモチーフにデザインされており、“幹”に相当する円筒部分の上部に、“葉”に相当する「キテンの葉」が被さる構造である。「キテンの葉」はA2サイズの紙面であり、設置する図書館や博物館が所蔵する学術資料をモチーフに学芸員とデザイナーが連携してデザイン・制作を行う。さらに、“幹”部分の底部にも、ロゴやソーシャルディスタンスを促す文言を入れることができる。「キテンの木」をベンチや机に置かれた利用を拒絶するサインの代わりに設置することにより、利用者に対して公共空間から拒絶を感じることを低減され、同時に施設に所蔵された学術資料に対する興味・関心を喚起されることが期待される。

4 事例紹介

2020年8月から石川県西田幾多郎記念哲学館（石川県かほく市、以下「西田記

図2：石川県西田幾多郎記念哲学館
における設置状況

念哲学館」）および大阪市立中央図書館（大阪府大阪市、以下「市立中央図書館」）で、「キテンの木」の設置を開始した。

西田記念哲学館では、展示空間中のベンチに「キテンの木」を設置した。設置状況を図2に示す。本施設における「キテンの葉」紙面は、西田記念哲学館が所蔵する資料の中から、哲学者西田幾多郎と関係が深い「善の研究」と「座る」をテーマとして対象資料を選定した。「キテンの葉」紙面のレイアウト・デザインはデザイナー原嶋氏が、解説文の作成・レイアウトのチェックを西田記念哲学館の学芸員が担当し、互いにテレビ会議やインターネット上の共有ドライブを介して協働作業を進めた。作成した紙面は「キテンの葉」として掲示するとともに、関心を持った利用者が持ち帰るための配布版をA3サイズに印刷し、「キテンの木」の側に置いた。

市立中央図書館では、図書閲覧スペースに「キテンの木」を設置した。外観を図3に示す。「キテンの葉」紙面の制作では、市立中央図書館がインターネット上で公開しているデジタルアーカイブ中のWebギャラリー「写真・絵葉書でめぐる大阪の近代建

図3：大阪市立中央図書館における
設置状況

築」から、大阪市立美術館や中の島公会堂などの大阪の近代建築を選択し、デザイナーと司書が密に連携して制作を実施した[4]。本事例のように公共図書館のデジタルアーカイブにおいて、資料デジタル画像など資料情報が利用可能な状態で公開されていることにより、デザイン制作の素材確保や権利処理の簡略化のみではなく、「キテンの木」など制作物に興味を持った利用者がその記載内容について、自身でさらに詳しく調べることが遠隔から可能になる。

4 まとめ

本プロジェクトでは、ソーシャルディスタンスの実現と新たな文化的空間の創出との両立を目指し、「キテンの木」の制作と公共博物館および図書館への設置を行った。デザイナーと研究者・学芸員・司書が協働することで、学術資料を活用したプロダクツの創出が促進され、さらに継続的な協働体制の確立に向けた基盤の構築が期待される。

今後の課題としては、第一に「キテンの木」の効果に関する定量的な評価である。制作に携わった学芸員・司書からは、概ね良好なコメントを得ることが出来たが、施

設の利用者からの反応をアンケート等で定量的に把握する必要がある。さらに、より客観的な評価手法として、「キテンの木」設置空間内における利用者の行動記録の収集等の検討をしたい。

第二に、普及に向けた事業モデルの確立である。「キテンの木」による学術資料の活用と文化的空間の創造を広く社会に展開させるためには、デザイナーの創造性および学術専門家の専門性に対する対価を明確にした社会性を有する事業モデルの構築が不可欠である。今後はこれらの課題に対しても、積極的に取り組む所存である。

謝辞

本プロジェクトの実施に際しては、石川県西田幾多郎記念哲学館および大阪市立中央図書館をはじめとした多くの方々に、多大なるご支援・ご協力を頂きました。関係者を代表して深く感謝致します。

参考文献

- [1] 厚生労働省新型コロナウイルス感染症について,
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000164708_00001.html (2020 年 11 月 23 日参照)
- [2] 堀井 洋, 地域における学術資料の継承・活用の現状とオープン化への期待, 情報知識学会誌, 2019, 29 巻, 4 号, p. 305-308,
https://doi.org/10.2964/jsik_2019_042
- [3] 佐久間 大輔, コロナ禍で博物館の受けた影響, 見えてきた価値, 文化経済学, 2020, 17 巻, 2 号,
p. 14, https://doi.org/10.11195/jace.17.2_1
- [4] 大阪市立図書館デジタルアーカイブ,
<http://image.oml.city.osaka.lg.jp/archive/detail?cls=gallery&pkey=103> (2020 年 11 月 23 日参照)